＜　教科・領域　＞

特別の教科　道徳

＜　論文題　＞

主体的な生き方を育む道徳教育
～ 道徳科の授業とすべての教育活動を通した取組 ～

山都町立清和中学校

目　次

はじめに

Ⅰ　研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ１～３

　１　研究主題・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ１

　２　研究主題設定の理由・・・・・・・・　Ｐ１～２

　３　研究主題の捉え方・・・・・・・・・　Ｐ２～３

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ３～４

　１　研究の仮説・・・・・・・・・・・・　Ｐ３

　２　研究の視点・・・・・・・・・・・・　Ｐ３

　３　研究の検証・・・・・・・・・・・・　Ｐ３～４

　４　研究の構想・・・・・・・・・・・・　Ｐ４

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ５～１７

　１　授業部会の取組・・・・・・・・・・　Ｐ５～１１

　２　関連部会の取組・・・・・・・・・・　Ｐ１２～１７

Ⅳ　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ１８～２０

　１　授業部会の成果と課題・・・・・・　Ｐ１８～１９

　２　関連部会の成果と課題・・・・・・　Ｐ１９～２０

Ⅴ　今後の志向・・・・・・・・・・・・・　Ｐ２０

おわりに

参考文献

研究同人

はじめに

次年度から完全実施となる中学校の新学習指導要領において、道徳教育については「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図るものである」と書かれています。

また、道徳科を要とし、教育活動全体を通して、道徳教育の目標である「人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」を達成するためには、個々の授業改善はもちろんのこと、学校としての組織作りや他の教科等との具体的な関連づけが必須です。

更には、本校の学校教育目標である「自己実現に向かって主体的に学ぶ心身共に豊かでたくましい生徒の育成」の中にある「自己実現」には、自分のことを正しく知り、理解する力、他者との関わりの中で深く考える力、そして、現実を踏まえてよりよく生きようとする意欲が欠かせません。それらの力を育てる大きな役割を担っているのが道徳教育であると考えます。

特別の教科としての道徳科がスタートして２年目を迎えました。どのような問いかけをすれば生徒が自分ごととして道徳的な課題を捉え、主体的に考えるのか、どのような授業展開にすれば生徒が互いの考えを出し合い、その考えを受け止めた上で更に深く考えるような授業をつくることができるのか。また、教科等と道徳教育の関連を図るとは、具体的に何をどうすることなのか。どの学校でも、これまでの道徳授業を見直し、様々な試行錯誤をしながら実践を重ねておられるのではないでしょうか。

本校では、令和元年度・２年度　文部科学省　道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業、熊本県教育委員会指定　道徳教育研究推進校事業に手を挙げ、実践研究を進めて参りました。しかし、本年度６月、前述した文科省及び県の事業を本年度は実施しないという連絡があり、文科省の指定も県教育委員会の指定もなくなりました。幸い、山都町教育委員会からの経済的援助を受け、昨年度からの研究を継続することができました。心から感謝しています。

３月から３ヶ月にわたる臨時休校から新年度がスタートするという、前例のない令和２年度も３学期を残すのみとなりました。たくさんの学校行事が規模縮小の方向に見直され、多くの校外研修が中止されました。そのような中でも、研究主任を中心に、昨年度から始めた道徳教育の研究を、地道に主体的に継続してきた本校職員を誇りに思うとともに、その努力に敬意を表します。

今回、２年間積み重ねてきた道徳教育の研究を教育論文としてまとめることで、皆様方のご指導を仰ぎ、今後の更なる研究の深まりにつなげたいと考えています。

ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

令和３年１月７日

山都町立清和中学校長　　荒　牧　和　子

Ⅰ　研究主題について

１　研究主題

主体的な生き方を育む道徳教育

～「主体的・対話的で深い学び」のある道徳科の授業を通して～

２　研究主題設定の理由

（１）学校教育目標の具現化を図るために

本校の学校教育目標は、「自己実現に向かって主体的に学ぶ、心身共に豊かでたくましい生徒の育成」であり、本年度のスローガンを「鍛えよう、主体性！育てよう、相手意識！」としている。これらの学校教育目標やスローガンの達成に向けて、道徳教育の果たす役割が大きいことは言うまでもない。また、そのことが学校教育目標達成に向けての重点実践事項の一つである「豊かな心」の育成の中に「『特別の教科　道徳』を要とした道徳教育の充実」という文言で示されている。道徳教育の充実が学校教育目標の具現化につながるということを考えると、研究主題との関連性は明確なものであると言える。

本校は、生徒数４３名と言う小規模な学校である。素直で思いやりがある生徒が多く、行事等には全校生徒一丸となって一生懸命に取り組む。昨年度、３学期の道徳の授業に対する生徒の振り返りでは、１年生の７１％、２年生の６７％（３年生は新型コロナウイルスによる臨時休業で実施できていない）の生徒が A（とても意欲的にできた）と自己評価しており、B（意欲的にできた）評価の生徒の割合も加えると「道徳教育の抜本的充実に向けて」文部科学省　初等中等教育局　教育課程課の調査結果から見られる「学年が上がるにつれて道徳の授業を楽しい・ためになると感じている児童生徒の割合が低下する」という状況は、現在のところ本校の生徒には当てはまっていない。

しかしながら、少人数であるため、授業の中で多面的・多角的な見方・考え方が出にくく、小学校入学から９年間クラス替えがないため、互いの理解や人間関係において固定化の傾向がある。そのことが、価値観が違う人と考えを出し合い、合意点を見つける活動の経験不足となり、主体性や自主性、他者とのコミュニケーション力における課題となって存在している。

本校は、昨年度、文部科学省、熊本県教育委員会、山都町教育委員会から道徳教育研究推進校の指定を受け、研究主題「主体的な生き方を育む道徳教育」に向けて、「主体的・対話的で深い学びのある道徳科の授業」に焦点をあてて研究・実践に取り組んできた。研究にあたっては、授業部会と評価部会を設定、授業部会では、学年部による授業の計画と練り上げ、指導過程（導入・中心発問・終末）の工夫、評価部会では、学年部による授業の記録と反省・評価、生徒の変容が見えるワークシートの工夫、学期ごとの振り返りの工夫という視点をもって主題に迫る研究・実践を積んできた。「特別の教科道徳」は、特別活動や総合的な学習の時間と同様、専門教科との違いから、よりチームで動きやすい協働性を生かした本校教師の取組のおかげで、教師の道徳の授業の指導力や評価全般における認知度は向上し、生徒たちの道徳性の育成に向けた取組に対しての一定の効果は実感できた。

今年度は、昨年度に引き続き「主体的な生き方を育む道徳教育」を目指して、昨年度の取組を発展させながら、道徳の授業の改善・充実を図るとともに、昨年度の研究の課題として明らかとなった「特別の教科　道徳」を要とした学校の教育活動全体を通して行う道徳教育について、道徳の授業と関連した取組についても研究を深めることの必要性を受けて、本研究主題を設定した。

（２）社会の要請から

平成２９年３月に告示された学習指導要領では、グローバル化の進展、情報通信技術など、科学技術の進歩、かってないスピードでの少子高齢化の進行という社会状況の中、一人一人が、道徳的価値の自覚のもと、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、より良い方向を目指す資質・能力を備えることの重要性を求めている。その告示後、２０１９年１２月以降、中国武漢市を中心に発生した新型コロナウイルス感染症が、短期間で全世界に広がり、日本、熊本県でも感染のニュースが連日流れ、学校が臨時休校となるなど不安定な状態が続いた。このことにより、多くの子どもたちが不安の中、予測を超えた日々の生活におかれてしまったと言っても過言ではない。そのことを鑑みるに、まさに今こそ生徒一人一人に主体的な生き方を育み、今の状況を打破、よりよい未来の創り手になるための教育が必要であることは言うまでもない。

３　研究主題の捉え方

本研究では、「主体的な生き方」については、「自ら考え、自ら判断し、他者との協働の中でよりよく生きる生き方」と捉えている。生徒に「主体的な生き方」を育むためには、

道徳科の授業の量的転換及び質の高い多様な指導方法を取り入れた授業、そして、学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握する評価を含めた質的転換が求められる。そのためには、昨年度の道徳科の授業、評価に対する研究・実践を改善・充実させることが必要であるとともに、道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものとされてきた。生徒一人一人に「主体的な生き方」を育むためには、道徳の授業、内容項目との関連を意識した学校行事、家庭・地域との連携や生き方を考えさせる集会が必要であると考え副主題を設定した。

Ⅱ　研究の方法

1　研究の仮設

研究の仮設として、仮説１と仮説２を設定、これらの仮説における取組を行うことによって、主体的な生き方が育まれるであろうと予測した。

（１）　仮説１：組織的な授業計画及び記録をシステム化し、指導過程と評価の方法を工夫改善すれば、生徒に主体的な生き方を育むことができるであろう。

（２）　仮説２：道徳の内容項目を意識した教育活動を行えば、生徒に主体的な生き方を育むことができるであろう。

2　研究の視点

研究の視点として、視点１と視点２を設定、視点１では、道徳の授業を通して主体的な生き方を育むために３つの研究内容を具体化した。視点２では、道徳の授業に関連した教育活動を通して主体的な生き方を育むために３つの研究内容を具体化した。

（１）　視点１：①組織的な授業づくりと実践
②指導過程のさらなる工夫
③生徒の変容を見取る評価の工夫

（２）　視点２：①道徳の内容項目を明示した諸活動の計画・実践
②家庭と連携した地域教材等の活用
③生き方を考える集会の計画・実施

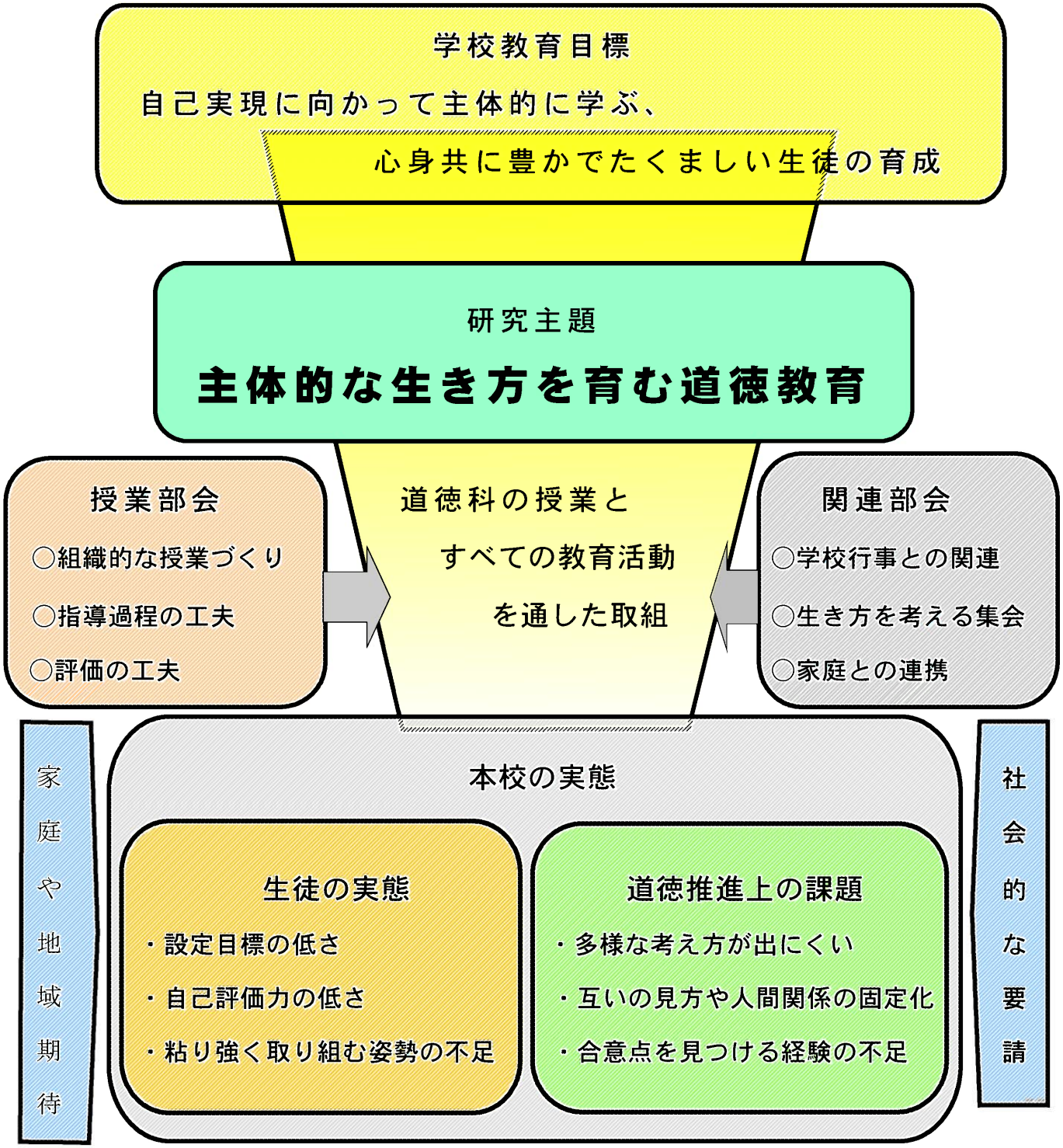
3　研究の検証

（１）　仮説１については、学期末の生徒の振り返りの集計結果の比較並びに「全国学力・学習状況調査」の生徒質問用紙を参考に作成した道徳の授業に関する意識調査を実施、

生徒の変容を数値で検証する。また、教師の意識調査も実施、２年間を振り返り教師の変容も数値で検証する。

（２）　仮説２については、「全国学力・学習状況調査」の生徒質問用紙を参考に作成した道徳の授業以外に関する意識調査を実施、生徒の変容を数値で検証する。また、家庭（保護者）に対してのアンケート調査も実施、数値や感想等で検証する。

４　研究の構想



Ⅲ　研究の内容

1　授業部会の取組

（1）　組織的な授業づくりと実践

①　学年会での授業づくりと反省

毎週学年会では，次時の授業担当者が道徳科の授業計画を作成し，学年部で検討した。授業後の学年会では，授業反省を行い，授業改善につなげた。また，今年度はＴ１，Ｔ２，Ｔ３の役割を下記のように明確にした。

Ｔ１：授業計画・提案，ワークシートへのコメントの記入
Ｔ２：生徒の発言記録，モラルの実の記録
Ｔ３：授業記録（記録シート，板書等の写真），授業評価

②　クラス担任以外の教師による授業

昨年度から引き続き道徳科の授業は，担任のみならず学年主任や副担任も授業を行った（資料１）。昨年度と比較しても担任以外の教師による授業が増える結果となった（資料２）。複数の教師が授業を行うことで，生徒の興味・関心が高まり，次の授業内容と授業者について尋ねることもあった。また，教師自身がお互いの授業を見合うことで，指導方法等についての改善点を見つけることができた。

更には，生徒数が少なく，様々な価値観に触れる機会の少ない生徒にとって，複数体制で授業に臨むことは多面的・多角的な視点で考える上で有効であった。

＜資料１　クラス担任以外の授業＞

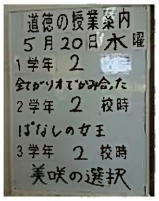
授業者	R１(%)	R２(%)
担任	72.2	50.0
担任以外	27.8	50.0

＜資料２　授業者の割合＞

③　他学年部による授業参観と授業の感想

他学年部の授業を参観した際には道徳教育コーナーに気づきを付箋で貼ることにした（資料３）。授業反省のときに，生徒の振り返り等と併せて，成果や課題を出し合うことができた。次の道徳科の授業でどの教材を扱うのかという授業案内を掲示し（資料４），空き時間には自由に参観できるようにしたことで，授業改善や指導力の向上につながった。

＜資料３　気づき等の付箋＞



＜資料４　授業案内＞

（2） 指導過程のさらなる工夫

① 清和スタイルの実践

昨年度の反省を踏まえ，指導過程について共通理解を図り，以下のような道徳科授業の進め方（清和スタイル）を全学年で実践した（資料５）。導入や終末での工夫は昨年度から引き続き行い，さらに今年度は展開を前段と後段に分けて時間を設定するように変更した。展開部分を２つに分けることで，主題について考えを深めた後で，自分自身のことについて考えるという流れを確立することができた。

授業前	授業開始前	○学年部による授業検討会をする。 ○アンケートをとる。 ○教材文を読ませておく。　等	・ホワイトボードや投影機の準備 ・教材やファイルを係が配布 ・モラルの木を手元に用意

指導過程	目安時間	○指導者の動き，事前準備	・生徒の動き
導入	7分	○本時の主題（内容項目）の確認をする。 ○教材や生徒の実態に合わせて，導入を選択する。 【４つから選択】 ① 自己の生活体験を振り返る。 ② 社会的な事例を紹介する。 ③ 主題に関わる問題意識をもたせる。 ④ 教材への興味関心を高める。	・２２の内容項目の中から，本時で考えていく主題（内容項目）について確認する。 ・教師の投げかけに対して自由に発言したり，活動に参加したりして，問題意識をもつ。
主題について考えを深める時間 展開前段（教材の内容）	23分	○前段では教材に関して発問し，考えを深める。 ○前段での発問は厳選し，補助発問１つ＋中心発問１つを基本とする。 【４つの発問類型から中心発問を選択】 ①共感的　②分析的　③投影的　④批判的 ○T2 が生徒の話し合いの様子を生徒の発言記録シートに記録する。 ○T3 が授業記録シートに記録する。	・ワークシートは，考えを整理するためのメモとして使う。 （自分の考え，友達の考えなど） ・中心発問についてペア，グループ，全体などで話し合いのルールにそって考えを伝え合う。 ・考えを伝え合う場面では，挙手のルールに従って，議論する。 挙手のルール ① グー…質問があります ② チョキ…付け足します ③ パー…異なる意見があります ・モラルの実に感想を記入し，モラルの木（個人用）に貼る。
自己を見つめ生き方を考える時間 展開後段（自分の生き方）	15分	○後段では，自己の生き方を見つめさせる発問をしたり活動をさせたりして，生徒が考える時間を十分に確保する。 ① 学校生活や家庭生活など身近な出来事につなげる。 ② これまでの自分の経験と重ねる。 ③ 簡単なロールプレイをする。 ④ 心情円（グラフ・メーター）を活用する。 等	
終末	5分	○本時の主題やねらいに合わせた終末をする。 【３つから選択】 ① 主題に関わる映像や画像を提示する。 ② 互いに考えを伝え合う。 ③ 教師や GT が実体験を語る。	・本時の振り返りを記入する。 ・本時の主題についての自己の授業前後での変容を感じたり，自他の授業中の頑張りに気づいたりする。

授業後	授業終了後	○授業前後の生徒の変容を評価するために，モラルの実の記述を T2 が写真に記録する。 ○授業記録シートや生徒の発言記録シート，参観者の付箋等をもとにした授業反省会をする。	・家庭で，保護者と一緒に家庭道徳の活動に取り組む。

＜資料５　清和スタイル＞

② 実際の指導過程での実践

ア 【導入】教材への関心を高める工夫

３年「好きな仕事か，安定かで悩んでいる」内容項目：C（13）勤労

教師が若い頃に抱いていた夢を動画で紹介した（資料６）。授業に興味をもたせるとともに本時の内容項目を意識させることができた。また，終末でなぜ教師になったのかを語ることで，終末に生きる導入になった。

＜資料６　導入の様子＞

イ 【展開前段】主題について考えを深める工夫

１年「郷土を彫る」内容項目：C（16）郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度

心情円や心情グラフなどに生徒のネームプレートを貼らせ，生徒の考えを可視化したことで（資料７），自分と他者を比べて考えさせることができた。また，授業の前半と後半での変化が明確になり，教師が生徒の考えの変容を見取ることができた。

＜資料７　展開前段の様子＞

ウ 【展開後段】自己を見つめ生き方を考える工夫

３年「ある日の午後から」 内容項目：A（1）自主，自律，自由と責任

教材から離れて自分自身のこととして考えることができるように，ロールプレイや動作化などの活動を取り入れた（資料８）。具体的な場面や心情をイメージすることができ，より主体的に生き方について考えを深めさせることができた。

＜資料８　展開後段の様子＞

エ 【終末】本時の主題やねらいを意識した終末の工夫

１年「どうせ無理という言葉に負けない」内容項目：A（5）真理の探究，創造

終末で，映像や画像を使用した（資料９）。他者の生き方を紹介することで教師による価値の押しつけを防ぎ，他者の姿から自分の生き方についての考えを深めさせることができた。

＜資料９　終末の使用＞

③　話し合い（議論）を深めるための工夫

ア　【挙手のルール】

昨年度からの課題で，話し合いが深まらない（一方通行のやりとりになってしまう）という課題があったため，今年度は授業の展開で意見交換をする際に，生徒に３種類の挙手をさせるようにした（資料10）。この挙手方法をとると，互いの意見の違いを明確にしたり，生徒の意見をつなげたりしていくことができ，更に議論に深まりが出た。また，この挙手方法をとると，教師側も生徒の意見が把握しやすくなり，「グー」→「チョキ」→「パー」の順番に指名をすると，発表が途切れずに活発な話し合い（双方向のやり取り）をする上で効果的であった。

＜資料 10　挙手のルールによる授業＞

イ　【話し合いのルール】

クリップボードにワークシートを挟み，席を立って数名の他者と意見交換する時間を設定した。生徒たちは，他者の意見に触れることで，新たな考えに気づいたり，自分の考えを深めたりすることができた。この活動でも，伝えて終わりにならないようにするために，双方向のやり取りになるようなルールを設定した（資料 11）。

＜資料 11　双方向のやり取りに向けたペアトーク＞

ウ　【自分の生き方について発表】

授業の展開後段や終末では，自分の生き方について考えを深め，発表する時間を設定した。ミニホワイトボードに考えたことを記入して発表させたり（資料 12），後述するモラルの実の記述を紹介させたりすることで，自分の生き方や授業での学びを全体に発信していくことができた。

＜資料 12　生き方についての発表＞

④　清和中版学習構想案の作成

研究授業や研究発表会にあたり，昨年度までは指導案を作成してきたが，熊本県立教育センターの指導を受け学習構想案を作成した（資料 13）。構想案作成にあたっては，「内容項目の理解」→「生徒の実態把握」→「教材の効果的活用」という授業づくりの基本を意識した。構想案は，校内研修で意見を出し合ったり，協力者の先生を招いて助言をいただいたりしながら，変更や加筆を施した。以下に示すのは，本校で考えた構想案の項目や内容をまとめたものである。

道徳科学習構想案

1　学習構想

・主題名

・ねらいと教材

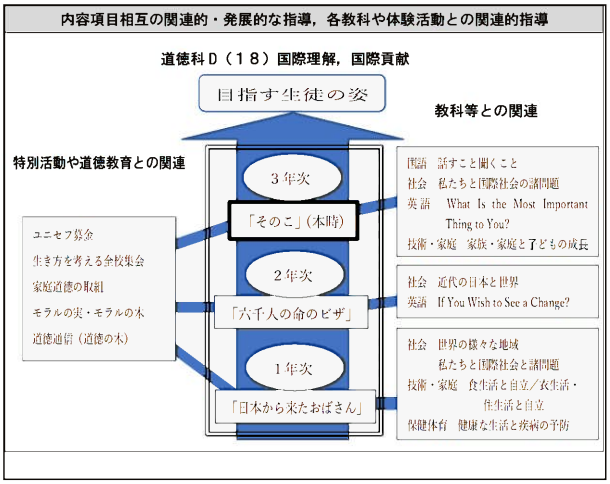
・評価の視点①・視点②

・目指す生徒の姿

・主題に迫る学習課題

・本時で働かせる見方・考え方

・内容項目相互の関連的・発展的な指導，各教科や体験活動との関連的指導



2　主題設定の理由

・学習指導要領における該当箇所（ねらいや指導内容についての教師の捉え方）

・生徒の実態（生徒の学習状況や実態と教師の願い）

（１）授業に関する実態（１・２学期の生徒自己評価の結果より）

（２）内容項目に関する実態（アンケート調査および HUMAN の結果より）

・教材の価値

3　指導にあたっての留意点

・授業計画・授業反省

・指導過程の工夫〔導入〕〔展開前段〕〔展開後段〕〔終末〕

・評価，モラルの実

・関連部会の取組

＜資料 13　学習構想案＞

（3） 生徒の変容を見取る評価の工夫

① 「振り返り」（自己評価）の分析，評価

ワークシートの下部に「振り返り」の欄を設けており，生徒は授業ごとに記入した（資料14）。４段階評価で〇をつけるやり方なので，時間はかからない。

①	教材について，興味をもって読めたか	４ ・ ３ ・ ２ ・ １
②	自分の考えをもち，友達に伝えることができたか	４ ・ ３ ・ ２ ・ １
③	友達の考えを，自分の考えに照らし合わせながら聞くことができたか	４ ・ ３ ・ ２ ・ １
④	授業の内容について，深く考えることができたか	４ ・ ３ ・ ２ ・ １

＜資料14　生徒の振り返りの欄＞

学年会での授業反省時に，平均値を確認し，授業を評価する一つの指標とした。また，合計ポイントの平均が高かった授業の流れや工夫を確認し，授業改善につなげた。

〈合計ポイントの平均が高かった授業と工夫点〉

【３年】「橋をかける心」C(13)勤労　評価平均3.91

〔工夫点〕保護者参観の授業であり，展開後半で，「仕事に対する思い」を保護者にインタビューし，その後，感想を交流した。

【１年】「短文投稿サイトに友達の悪口を書くと」B(8)友情，信頼　評価平均3.89

〔工夫点〕使用する教材文の内容量を限定したことにより，話し合う時間を確保した。

インタビューや話し合いなど，「他者の考えを聞く」時間を確保することは，道徳科の授業に対する生徒の満足度を高めると考えられる。

【２年】ユニット教材「震災の中で」C(13)勤労　評価平均3.79

「お弁当のことで文句を言われた場面をやってみよう」C(13)勤労　評価平均3.78

〔工夫点〕第１時の導入で「人は何のために働くのだろう」という２時間を貫くテーマを投げかけた。第２時では，教材文の一部をグループで動作化し，その後感想を交流した。

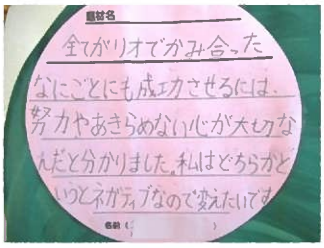
２時間を貫くテーマを示したことで，生徒たちが，「働く」ということの意味について，考えを深めることができた。また，動作化により登場人物の言動を体感したことで，自分につなげて考えることができた。

② 「モラルの実」（授業の感想）の分析，評価

ア 授業の終盤で「モラルの実」（授業の感想等）を記述し，その内容を以下の２つの着眼点で評価した。

「A 多面的・多角的な見方へと発展させているか【広がり・深まり】」（自分とは違う立場を理解している，対立する立場で取り得る行動を考えようとしている等）

「B 自分自身とのかかわりの中で考えを深めているか【自分ごと】」（登場人物を自分に置き換えて考えている，自分自身を振り返っている等）



＜資料 15 モラルの実＞

〈モラルの実の記述内容と評価〉

【１年】「火の島」D（21）感動，畏敬の念

自然では，水害や地震，雷など，人間は自然に勝てないけど，違う面から見ると，とても神聖で美しいものがあり，人の心を動かす力があるんだと思いました。
評価：「自然」について，多面的に捉えている。→A【広がり・深まり】

【２年】「震災の中で」C（13）勤労

私は「働く」ということの中心には，「誰かのために」「社会のために」という気持ちがあることを初めて感じました。
評価：「働く」ということについて，捉え方を広げている。→A【広がり・深まり】

【３年】「缶コーヒー」C（10）遵法精神，公徳心

自分は多分そういう事に遭遇しても言えないので，言う力をつける。まずは自分がルールを守る。注意された時は素直に受け止める。
評価：主人公を自分に置き換え，自分を見つめてつけたい力を考えている。 →B【自分ごと】

イ 「モラルの実」の記述内容をもとに，毎学期の通知表及び指導要録における「道徳科」の評価に生かした。

【モラルの実】		【通知表の評価】		【指導要録の評価】
命は一つしかない尊いものでお金では買えない。限界まで生きようとする気持ちを大切にする。	→	「いのちって何だろう」の学習では，命の尊さや一生懸命に生きていくことの美しさを知り，色々なことに挑戦し，精一杯生きようとする気持ちの大切さについて考えを深めていました。	→	道徳科の学習では，道徳的価値の理解をもとに，それを実現することの難しさを自分ごととして考え，自己のよりよい生き方について考えを深めていた。

2　関連部会の取組

（1）　道徳の内容項目を明示した諸活動の計画・実践

道徳科の授業だけではなく，学校で行う諸活動において，教師が道徳の内容項目を意識した教育活動（計画・実践・評価）を行い，生徒に道徳の内容項目を意識した学習活動（事前学習・実践・振り返り）を行わせ，生徒の「主体的な生き方」につなげるために，諸活動の計画に関連する道徳の内容項目を明示することにした。

また，関連する道徳の内容項目を意識した取組が確実になされるよう，「どのように生徒に内容項目を意識させるか」の「事前指導（事前学習）の手立て」，「どのように生徒に振り返りを行わせるか」の「事後指導（振り返り）の手立て」を具体的に明記するようにした。

【実践例】体育大会

本年度の体育大会の実施計画においては，「目的」や「方針」の後に，「道徳教育との関連」の項目を入れ，別葉で体育大会に関連する内容項目を確認し，４つの内容項目を設定している（資料 16）。また，事前指導・事後指導において，「いつ」「誰が」「どのように」行うのか，できる限り具体的に記入している（資料 16）。この実施計画をもとにして実際に行事に取り組んだ（資料 17～20）。

令和２年度　第４７回　山都町立清和中学校体育大会実施計画

清和中学校体育部

１．目的
（１）　保健体育科学習の成果を発揮する場とし、体力・技能の向上を図り、心身の健全な発達を促す。
（２）　学年の交流を深めるとともに、学年間の結びつきを密にし、学校全体の意気を高揚させる。
（３）　生徒会組織や学級活動を盛り上げ、集団への所属感や連帯感を高めるとともに自主性を養う。
（４）　保護者及び地域の方々の本校教育に対する理解と協力を促進させる機会とする。

２．方針
（１）　保健体育科の学習を中心とした「学習成果発表の場」ということを基本とし、生徒の主体的活動が展開されるよう場と種目の設定を行う。
（２）　集団行動や係活動等を通して、集団の一員としての自覚や責任感が高まるよう必要に応じて指導を行う。

３．道徳教育との関連
（１）　関連する道徳の内容項目について
Ａ（２）節度，節制　　Ａ（４）希望と勇気，克己と強い意志
Ｃ（１０）遵法精神，公徳心　　Ｃ（１５）よりよい学校生活，集団生活の充実

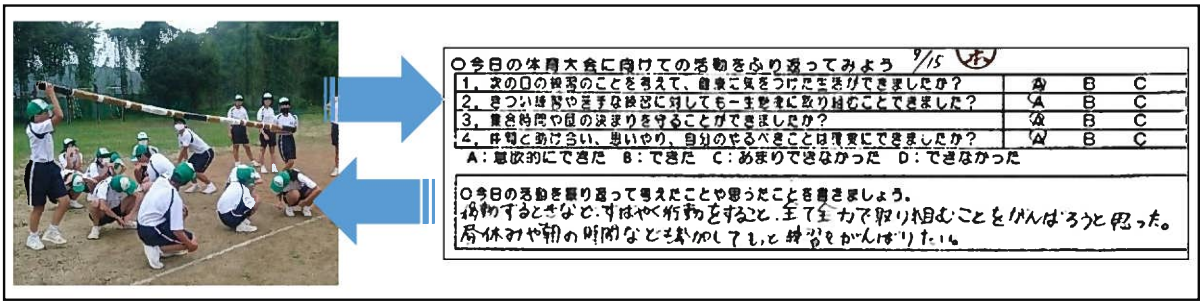
（２）　事前指導（事前学習）の手立て
・　体育主任が、結団式の中で関連する内容項目を踏まえて「育てたい心」について指導する。
・　各学級で、学級活動「体育大会を成功させよう」の時間に、関連する内容項目を踏まえて「育てたい心」について指導し、キャリアパスポートにそれぞれが育てたい心を記入させる。
（３）　事後指導（振り返り）の手立て
・　各学級で、帰りの会の時間に、「振り返りシート」をもとに、その日の体育大会練習の取組を振り返らせる。
・　各学級で、体育大会終了後、清和タイムの時間に、キャリアパスポートに育てたい心についての振り返りを記入させる。

＜資料 16　道徳の内容項目を明示した体育大会実施計画＞

＜資料 17　結団式での体育主任の講話＞

育てたい心（道徳教育との関連）
・自分のやるべきことを確実にする。
・練習に一生懸命取り組む。

＜資料 18　キャリアパスポートを活用した生徒一人ひとりの目標設定＞



＜資料 19　練習への取組と帰りの会での振り返り＞

育てたい心（道徳教育との関連）の振り返り
練習から一生けん命取り組むことができ、
いろんな役割を責任もってできた。

＜資料 20　キャリアパスポートを活用した体育大会後の振り返り＞

（2）　家庭と連携した地域教材等の活用

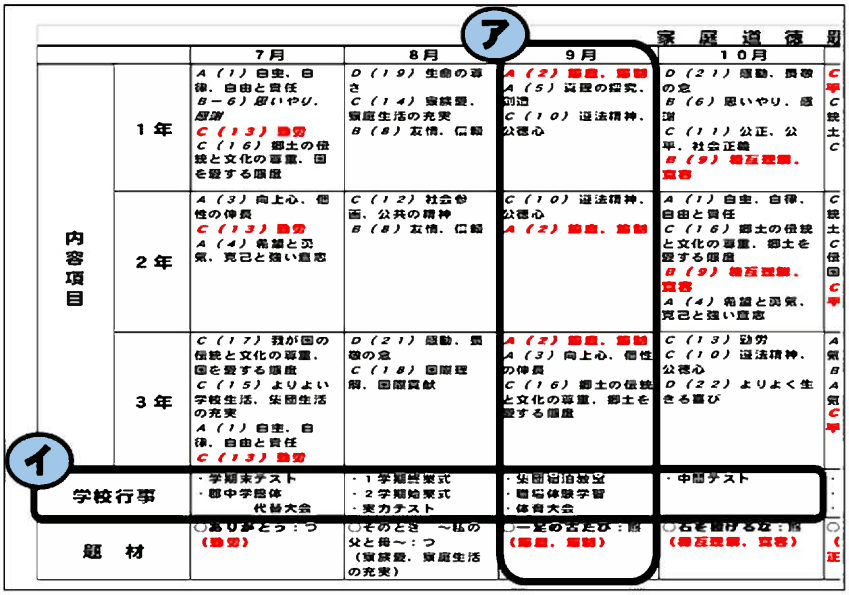
道徳の時間に扱えない地域教材を学ぶとともに，同世代以外の経験豊かな家族と意見交換することで，多角的・多面的な考えに触れ，道徳性を養うことをねらいに取組を行った。以下に具体的実践について示す。

①　実施日

毎月，第一日曜日の家庭教育の日を含む週末を「家庭道徳の日」と定め，「熊本の心」や「つなぐ～熊本の明日へ～」に掲載されている教材文を活用し，家族で感じたことを交流する時間を設けた。

②　資料選び

各家庭の負担軽減を考慮し，兄弟がいても一緒に学べるよう，学校で統一した（全学年共通）資料を扱うこととした。また，学びの深まり・定着をねらい，学校行事や各学年の道徳科の授業計画をもとに関連した内容を選定することにした（資料 21）。



家庭道徳

		7月	8月	9月	10月	
内容項目	1年	A（1）自主、自律、自由と責任 B－6）思いやり、感謝 C（13）勤労 C（16）郷土の伝統と文化の尊重、国を愛する態度	D（19）生命の尊さ C（14）家族愛、家庭生活の充実 B（8）友情、信頼	A（2）節度、節制 A（5）真理の探究、創造 C（10）遵法精神、公徳心	D（21）感動、畏敬の念 B（6）思いやり、感謝 C（11）公正、公平、社会正義 B（9）相互理解、寛容	C平 C統 C土 C
	2年	A（3）向上心、個性の伸長 C（13）勤労 A（4）希望と勇気、克己と強い意志	C（12）社会参画、公共の精神 B（8）友情、信頼	C（10）遵法精神、公徳心 A（2）節度、節制	A（1）自主、自律、自由と責任 C（16）郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度 B（9）相互理解、寛容 A（4）希望と勇気、克己と強い意志	C統 C土 C伝 C国 C平
	3年	C（17）我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度 C（15）よりよい学校生活、集団生活の充実 A（1）自主、自律、自由と責任 C（13）勤労	D（21）感動、畏敬の念 C（18）国際理解、国際貢献	A（2）節度、節制 A（3）向上心、個性の伸長 C（16）郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	C（13）勤労 C（10）遵法精神、公徳心 D（22）よりよく生きる喜び	A気 B A気 C平
学校行事		・学期末テスト ・郡中学総体 代替大会	・1学期終業式 ・2学期始業式 ・実力テスト	・集団宿泊教室 ・職場体験学習 ・体育大会	・中間テスト	・ ・ ・
題材		○あり夢とう：う （勤労）	○そのとき　～私の父と母～：つ （家族愛、家庭生活の充実）	○一足の古たび：節 （節度、節制）	○古を訪ねる女：相 （相互理解、寛容）	○ （ 正

＜資料 21　「家庭道徳の日」年間計画の例＞

ア　各学年の道徳科年間計画より，内容項目を月ごとに整理し，共通する内容項目の教材文を選定する。

例）９月の場合はＡ（2）節度，節制が各学年の共通する内容項目（赤字）であるため「家庭道徳の日」の教材文として「一足の古たび」（熊本の心：節度，節制）を選定。

イ　共通する内容項目がない月は，学校行事等と関連させて教材文を選定する。

例）８月の場合は各学年の共通する内容項目がないため，夏休みの家庭生活を意識して，「そのとき～私の父と母～」（つなぐ：家族愛）を選定。

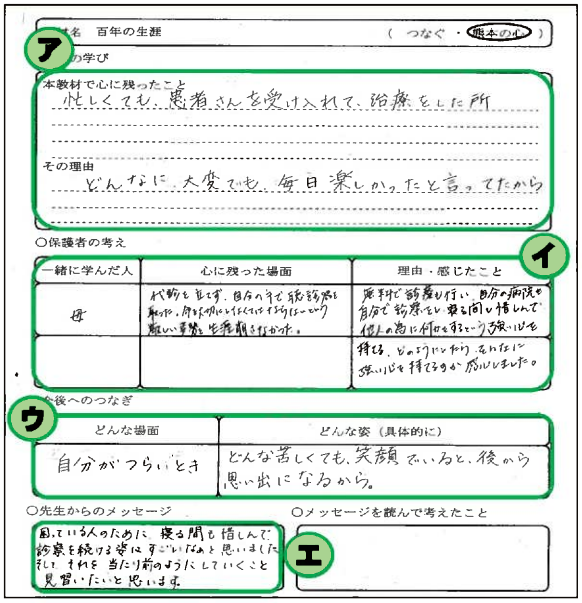
③　家庭道徳シートの活用（資料 22）

ア　生徒が，教材文を読んで「心に残ったこと」と「その理由」を記入する。

イ　保護者に「心に残った場面」と「その理由」を記入してもらう。

ウ　今回の学びを今後，「どのような場面」で「どんな姿」として生かしていくかを考える。

エ　提出後，教師よりメッセージを送る。



名　百年の生涯　（つなぐ・熊本の心）

の学び

本教材で心に残ったこと
忙しくても、患者さんを受け入れて、治療をした所

その理由
どんなに、大変でも、毎日楽しかったと言ってたから

○保護者の考え

一緒に学んだ人	心に残った場面	理由・感じたこと
母	代物を使わず、自分の手で紙袋を貼り、[illegible]難しい事業を生涯続けた。	薬手袋作り行い、自分の病院を自分で診療をし、患者を思い情しんで他人の為に何かをするという強い心を
		持ち、どのようにやり、それなに強い心を持てるか感心しました。

今後へのつなぎ

どんな場面	どんな姿（具体的に）
自分がつらいとき	どんな苦しくても、笑顔でいると、後から思い出になるから。

○先生からのメッセージ
困っている人のために、寝る間も惜しんで診療を続ける姿はすごいなあと思いました。私は、それを当たり前のようにしていくこと見習いたいと思います。

○メッセージを読んで考えたこと

＜資料 22　「家庭道徳シート」の例＞

④　実施上の留意点

ア　学級懇談会で趣旨・実施方法等を説明し，協力依頼をする。

イ　実施日前には学級通信等でお知らせと協力依頼をする。

ウ　保護者と一緒に学べない（仕事が忙しい・時間が合わないなど）時の配慮として，生徒が自分の考えのみを書いて提出しても可とする。

⑤　事後の活用

ア　シートには教師からのメッセージを送る。

イ　道徳通信や学校ホームページに掲載し，生徒や保護者と学びを共有する。

（3）　生き方を考える集会の計画・実践

①　目的と道徳教育との関連について

生き方を考える集会は昨年度から実施されている。その目的は，これからの生活や将来の生き方を考え，学ぶこと，働くことの意義や役割及びその多様性を理解し，自己の生き方の選択に生かすことができるようにすることである。身近な存在である教師や地域の方々の様々な生き方を考える話を聞くことは，生徒の主体的な生き方を育むために有効であると考えた。今年度は，講話のテーマに関連する道徳の内容項目を意識した取組を行った。講話を通して，自ら考え他者と意見交換をすることで，生徒の道徳性を育むことをめざした。

②　集会前後の取り組み

生き方を考える集会の前に，次回の講師，内容項目，テーマを生徒へ掲示板で紹介した（資料 23）。次回の集会を楽しみにしている生徒も多く，関心を高めることができた。そして，集会が終わると，集会の様子を掲示板にて紹介した。また，各学年１名ずつ生徒の感想をモラルの星（資料 32）に記入し，モラルの木に掲示した。

＜資料 23　「生き方を考える集会」の掲示＞

③　集会のやり方

集会は，月に１回実施，時間は２０分（地域の方の場合５０分）で生徒が運営した（資料 24）。話を聞いた後，４～５名のグループに分かれ，教師も一緒になって意見交換を行った。集会後，感想を書いて掲示した。

＜資料 24　生徒による運営＞

ア　教師による講話

内容項目：Ｂ（６）思いやり，感謝 題名「青年海外協力隊を通して見えたもの」

青年海外協力隊員として赴任した学校の様子を話した（資料 25）。今ある日常は当たり前のことではなく，学べることに感謝して過ごして欲しいと伝えた。

＜資料 25　教師による講話＞

イ　地域の方による講話

内容項目：Ｄ（２１）感動，畏敬の念 題名「星とともに歩んで３６年」

以前，清和天文台に勤務されていた PTA 会長が，撮影した星の写真を紹介しながら熱く語った。清和の自然の素晴らしさが再発見できた講話だった（資料 26）。

＜資料 26　地域の方による講話＞

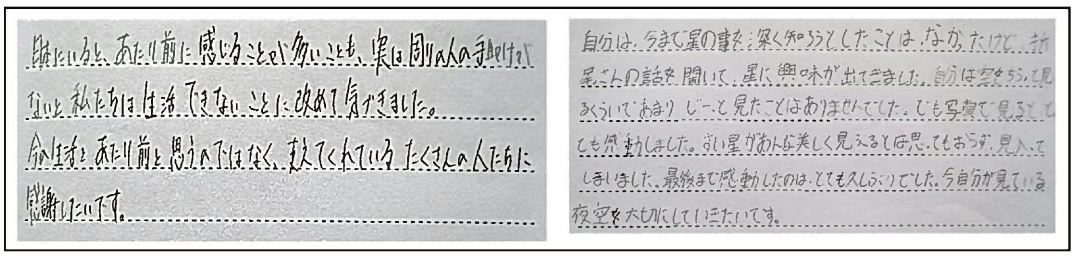
ウ　グループでの意見交換

講話の後，司会の生徒を中心に，内容項目を意識した意見交換を行った（資料 27）。講話の感想を言い合うのではなく，テーマに関わる内容項目について生徒同士で意見交換ができ，さらに考えを深めることができた。

＜資料 27　グループによる意見交換の様子＞

エ　集会後の感想

集会後，多くの生徒が自分と重ね合わせた感想を書いていた。また，これからの目標や進路についても記述するなど内容項目につながる学びが確認できた（資料 28）。



当たりにすると、あたり前に感じることが多いことも、実は周りの人の手助けがないと私たちは生活できないことに改めて気づきました。
今生きてあたり前と思うのではなく、支えてくれている たくさんの人たちに感謝したいです。

自分は、今まで星の事を深く知ろうとしたことはなかったけど、今日星さんの話を聞いて、星に興味が出てきました。自分は空をちらっと見るくらいであまりじーっと見たことはありませんでした。でも写真で見ることでも感動しました。小さい星があんな美しく見えるとは思ってもおらず見入ってしまいました。最後まで感動したのは、とても久しぶりでした。今自分が見ている夜空を大切にしていきたいです。

＜資料 28　生徒の感想＞

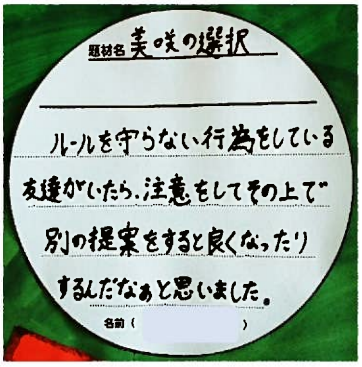
（4） モラルの木を活用した学びの共有と足跡

道徳科の授業，諸活動，生き方を考える集会における生徒の学びを共有させるため，「モラルの木」掲示コーナー（資料 29）を作成した。生徒の学びを掲示していくことで，多様な考えに触れさせたり，これまでの学びを振り返らせたりすることを通して，生徒の「主体的な生き方」につなげることを目的として取り組んだ。

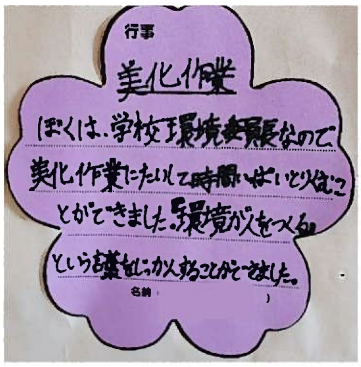
＜資料 29　モラルの木掲示コーナー＞

学年ごとに「モラルの木」掲示コーナーを設け，道徳科の授業，諸活動，生き方を考える集会の実施ごとに生徒一名を選び，道徳科の授業はモラルの実（資料 30），諸活動はモラルの花（資料 31），生き方を考える集会はモラルの星（資料 32）に学びを書かせ，モラルの木に貼っていった。また，モラルの実は道徳科の授業の内容項目ごとに色を分けた。さらに，新たに貼ったものが分かるように「ＮＥＷ」と書いた矢印をつけるようにした。

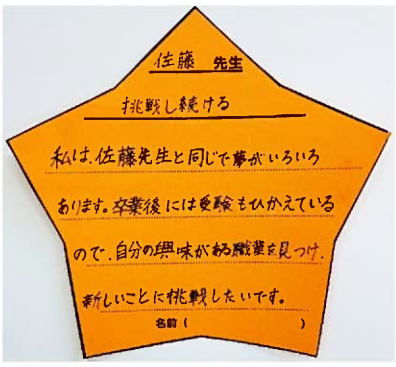
「モラルの木」掲示コーナーが，徐々に賑やかになっていく姿から，学びの蓄積が目に見えて分かるようになり，生徒同士が楽しみながら次は私の番だという思いで，学びの共有をする場となった。さらに，学校教育活動全体で道徳の内容項目を意識化することにつながった。



＜資料 30　モラルの実＞



＜資料 31　モラルの花＞



＜資料 32　モラルの星＞

Ⅳ　研究の成果と課題

1　授業部会の成果と課題（◎：成果、●：課題）

（１）組織的な授業づくりと実践

◎　学年部のローテーションによる授業のため、生徒は、多様な価値観やさまざまなものの見方に出会うことができた。また、教師自身も他の教師の実践に学ぶことが多くあり、お互いの学びとなった。

◎　Ｔ１，Ｔ２，Ｔ３の役割を明確にしたことで、生徒の支援、授業の記録、評価を意識した観察など、様々な場面での協働が道徳科の授業の充実につながった。

（２）指導過程のさらなる工夫

◎　授業の展開部分を前段と後段で分けたことで、主題について考えを深めた後に自分自身のことについて考えるという流れを学校全体で確立することができた。

◎　話し合い（議論）を深める工夫を行ったことで、一方通行の発表ではなく双方向のやりとりが生まれ、生徒が他者の考えをふまえて自分の考えを深めることができた。

●　今年度は清和スタイルを共通理解して全校で取り組み、指導過程の確立に力をいれてきたが、今後は、さらに「考え、議論する道徳」に向けて、教師の発問に対する指導力を磨く必要がある。

（３）生徒の変容を見取る評価の工夫

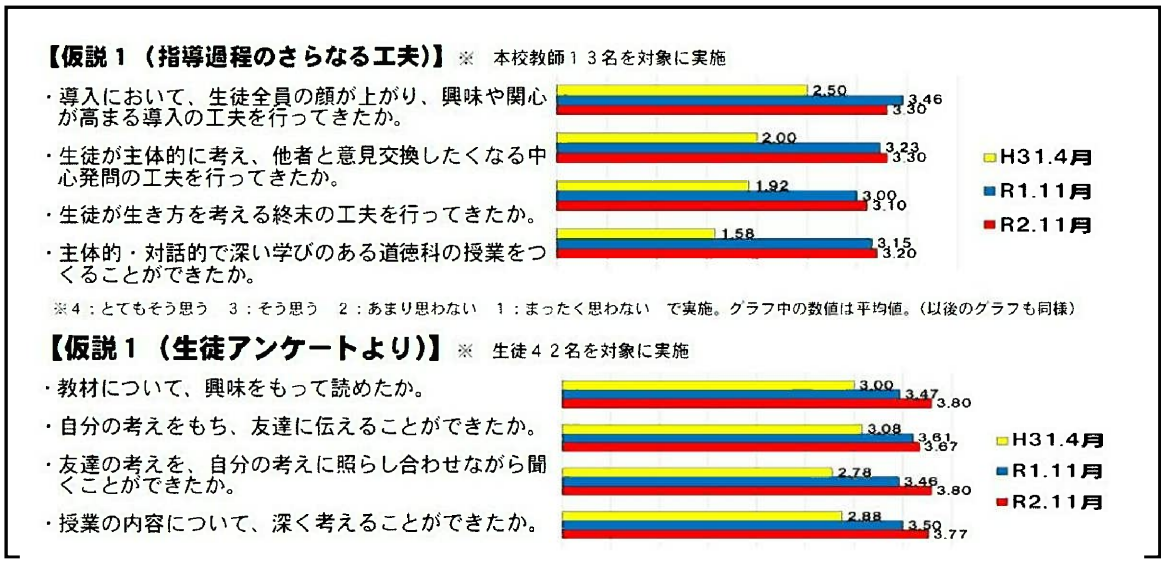
◎　生徒の「振り返り」（自己評価）の平均値を見ることは、教師自身の授業がどうであったかを振り返る一つの指標になった。また、一人の生徒が、どの授業のどの項目で高い自己評価をしているかを見ることで、生徒の興味・関心や学びの様子を知ることができた。

●　「振り返り」（自己評価）の評価基準が生徒によって異なり、どの授業の時も変わらない評価をつけている生徒もいた。自己評価力の育成とともに、教師側が見取る力をつける必要がある。

（４）授業部会の成果に関わる調査結果から（資料 33）

教師アンケートでは、「導入の工夫」においては、昨年度より平均値が下がったものの、その他、「中心発問の工夫」、「終末の工夫」、「主体的・対話的で深い学びのある道徳科の授業」の３項目については、昨年度よりも上回っている。そして、道徳科の授業における指導や評価の工夫を重ねたことで、生徒アンケートの集計結果では、どの項目も昨年度を上回っており、道徳科の授業を通して、研究主題の「主体的な生き方」につながる「自ら考え、自ら判断し、他者との協働」による「主体的・対話的

な学び」への前進が図られた。



＜資料 33　仮説１に対する教師アンケート・生徒アンケート＞

２　関連部会の成果と課題（◎：成果、●：課題）

（１）道徳の内容項目を明示した諸活動の計画・実践

◎　諸活動の実施にあたって、道徳の内容項目を明示、それに伴う取組を具体化したことで指導にあたる教師の意識が大きく高まり、諸活動後の生徒の振り返りにおいて、道徳の内容項目に関連した記述が見られるようになった。

●　生徒の変容について、量的評価（数値）による検証の実施が難しかった。

（２）家庭と連携した地域教材等の活用

◎　生徒と保護者が、家庭において道徳についての意見を交わす機会が持てた。

◎　各学年の道徳科年間指導計画が行事と関連付けて作成してあるため、道徳・行事・地域教材をシステム化した教育活動が展開できた。

●　家庭によって取組に温度差があった。また、保護者に見せていないなど、家庭内で意見交換する場を設けることができていない生徒がいた。

（３）生き方を考える集会の計画・実践

◎　身近な教師や地域の方が、これまでの生き方を話したりメッセージを伝えたりすることで、生徒は自分自身を見つめ、自分の生き方について真剣に考えることができた。また、地域の方の話を聞くことで、地域の良さを再発見し、これからの地域の在り方についても考えることができた。

◎　講話の後の意見交換では、あらかじめ設定していた道徳の内容項目における意見交

換の場としたことで、話し合いを深めることができた。

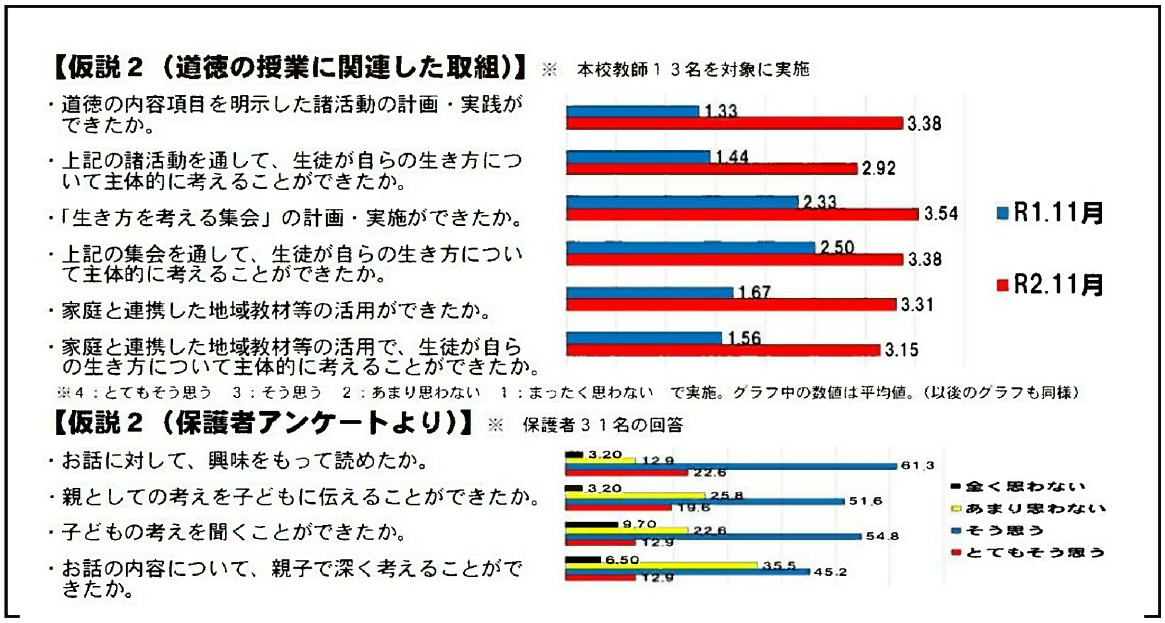
（４）モラルの木を活用した学びの共有

◎　掲示コーナーに貼られたモラルの実・花・星が増えることで、学びの足跡が実感できるとともに生徒同士の学びの共有や多様な考えに触れる場となった。

●　掲示コーナーの場所や貼り方を検討することで、より一層、生徒同士の学びの共有化を図る。また、貼り方についても道徳の授業・諸活動（行事）・生き方を考える集会を関連付けた掲示にする必要がある。

（５）関連部会の成果に関わる調査結果から（資料 34）

教師アンケートの結果では、どの項目も昨年度より向上しており、「生徒が主体的に考えることができたか」についても手応えが感じられる。また、家庭との連携に向けた取組「家庭道徳の日」における保護者アンケートの結果では、どの項目も「そう思う」と答えた割合が最も高く「良い取組」との意見をいただいている。



＜資料 34　仮説２に対する教師アンケート・保護者アンケート＞

Ⅴ　今後の志向

２年間に渡る「主体的な生き方を育む道徳教育」を主題とした研究・実践により、３年前と比較すると、道徳科の授業、行事、集会等へ取り組む生徒の姿に良い変化がもたらされていると教師全員が実感している。しかしながら、個々の生徒の「主体的な生き方」が育まれているか否かについての確固たる検証方法については、今後、さらに研究を継続する必要性を強く感じるところである。

おわりに

今回の研究を通して、「考え，議論する道徳」の実現の難しさを改めて実感しました。自分との関りの中で主体的に考えさせる発問、少人数による充実した話し合い活動、価値の自覚化に迫る手立てなど、研究・実践を進めるほど「特別の教科　道徳」に対する質的転換が必要不可欠であることに直面しました。だからこそ、より深い教材研究の大切さ、必要性を感じることができました。

清和スタイルの授業への取組は授業計画から授業後の反省まで各学年部で行ってきました。一つの授業を作り上げるために意見交換を行いながら実践を積み重ねてきました。その結果、授業を終えて職員室に戻るたびに授業の成果や課題を出し合い、生徒の様子がどうだったか，次の授業ではどうしたいか、自然に会話が生まれるようになってきました。

また、道徳科の授業にとどまらず、家庭や地域と連携する道徳教育にも取り組んできました。清和地区にある地域の宝を活用し、生徒が「主体的に生きる」自分の生き方を考えさせる取組、「家庭道徳の日」を実施し多面的、多角的な意見に出合わせる機会を設けてきました。

多数の教師が道徳科の授業を担当することは、当然、どの教師も授業経験を持つこととなり、お互いに改善に向けた考えを示すことができるという強みと同時に支え合う意識が醸成されたことも成果の一つであったと考えられます。来年度も課題の改善に向けて、チームとしての取組をより良い形で行っていきたいと考えています。

今回は、この論文を最後までお読みいただきありがとうございました。関係の皆様には、今後ともご指導、ご支援いただきますようお願い申し上げます。

【参考文献】

○　熊本県教育庁義務教育課　【平成３１年度義務教育課取組の方向】
○　文部科学省　【中学校学習指導要領】
○　文部科学省　【中学校学習指導要領　解説　―総則―】
○　文部科学省　【中学校学習指導要領　解説　―特別の教科　道徳―】
○　文部科学省　【道徳教育の抜本的充実に向けて】
○　永田繁雄　【発問の立ち位置の四区分】
○　永田繁雄　【「道徳科」評価の考え方・進め方】

【研究同人】

荒牧　和子　山口　太　江藤英二郎　松本　巧　佐藤　直見
佐藤　奈穂　中村　朋美　西　陽平　松本　崇寿　酒井健太郎
片岡亜由美　松村みゆき　上田　郁子　大友　彰　室口しのぶ
大久保ルミ　田原　文　Mahadi Hassan